

平成27年度教育関係共同利用拠点シンポジウム 「勢水丸による共同利用拠点事業の推進と今後の展開」

奥村 順哉¹, 前川 陽一¹, 中村 亨¹, 岡田 果林¹

¹ 三重大学大学院生物資源学研究科附属練習船勢水丸

Symposium report on "Promotion of joint-use base business by SEISUIMARU and Future Development"

Junya OKUMURA¹, Yoichi MAEKAWA¹, Toru NAKAMURA¹ and Karin OKADA¹

¹ Training and Research Vessel SEISUIMARU, Graduate School of Bioresources, Mie University,
1819-18 Oguchi-cho, Matsusaka, Mie 515-0001, Japan

Abstract

This symposium, Promotion of joint-use base business by training ship SEISUIMARU and Future Development, was held on December 18, 2015. The purpose of the symposium is to review the past activities of the center, and to examine the future work and improvement. Many students, professors and staff belong to the Faculty of Bioresources, Mie University participated in the symposium. Educational programs were presented by professors of Kyoto University, Kitasato University, Kougakukan University and Mie University. Finally, the prospects for SEISUIMARU were discussed.

Key Words: 教育関係共同利用拠点制度, 勢水丸, 食文化教育

1. はじめに

平成27年12月18日, 三重大学総合研究棟Ⅱメディアホールにて, 平成27年度教育関係共同利用拠点シンポジウム「勢水丸による共同利用拠点事業の推進と今後の展開」が開催された。

三重大学大学院生物資源学研究科附属練習船勢水丸(以下勢水丸)は, 「黒潮流域圏における生物資源と環境・食文化教育のための共同利用拠点」として, 平成22年度から文部科学省の教育関係共同利用拠点事業に取り組んできた。平成27年度からは, 第2期目の拠点認定を受け, 本共同利用拠点事業の柱である海洋食文化実習航海を含む

公開実習航海と他大学の単独航海による共同利用が進んでいる。本シンポジウムは第2期目の拠点認定後最初のシンポジウムであり, 共同利用の進展を確認するとともに幅広い見地からの意見を求めることを目的に開催された。

2. 概要

本シンポジウムは, I. 共同利用の推進, II. 拠点化事業のさらなる展開, III. 総合討論の三部構成で行われた。はじめに, 三重大学大学院生物資源学研究科 梅川逸人 研究科長より開会の挨拶があった。I. 共同利用の推進として, 勢水丸 中村亨

2016年11月12日受理

¹ 〒515-0001 三重県松阪市大口町1819-18

* For correspondence (e-mail: j-okumura@bio.mie-u.ac.jp)

一等航海士より、共同利用拠点事業の概説があり、北里大学海洋生命科学部 中村修 准教授、京都大学総合人間学部 宮下英明 教授から各単独航海の報告が、三重大学大学院生物資源学研究科 立花義裕 教授から勢水丸を利用した共同研究についての報告が行われた。続いて、II. 拠点化事業のさらなる展開として、三重大学生物資源学部学生の森田充優君から学生視点での海洋食文化実習航海の報告、皇學館大学文学部 齋藤平 教授によるCOC事業と海洋食文化実習の関係性についての講演が行われ、三重県農林水産部 永瀨亨 水産資源課長より、三重県の水産業と行政の役割についての説明が行われた。そして、III. 総合討論が行われ、各講演に対する質疑応答、今後の展望、課題についての舌戦が繰り広げられた。最後に勢水丸 前川陽一 船長の言葉をもってシンポジウムを閉会した。

I. 共同利用の推進

「拠点事業の概要 ～教育関係共同利用拠点としての勢水丸」

講演者：勢水丸 中村亨 一等航海士

共同利用拠点事業の概要について講演が行われた(写真1)。共同利用拠点事業制度の説明、全国の拠点施設の紹介、拠点施設の認定基準そして勢水丸の拠点認定までの流れや認定されてからの活動内容やそれらの形態、勢水丸で行われる単独航海、公開実習航海といった拠点事業について紹介した。



写真1 勢水丸 中村一等航海士講演の様子

「勢水丸での海洋実習2年目の報告」

講演者：北里大学海洋生命科学部

中村修 准教授

本年度で2年目となる単独航海「海洋実習」の

報告が行われた(写真2)。まず、東日本大震災により岩手県にあった北里大学三陸キャンパスが相模原キャンパスに移転した経緯に触れ、学生と海の接点を作り出すため、他大学の練習船を利用した海洋実習を行うに至ったことを説明した。実習は各種ネットによる生物採集、CTD等による海洋観測を主とし、参加した学生からは高い満足度を得られたということであった。



写真2 北里大学 中村准教授講演の様子

「京都大学総合人間学部総合フィールド演習」

講演者：京都大学総合人間学部 宮下英明 教授

引き続き単独航海利用校として、単独航海「総合フィールド演習」の報告が行われた(写真3)。総合フィールド演習は、同一の水域・地域を対象に多分野による調査を行い、総合的に解析することによってフィールド科学の知識・技術の基礎と応用を学ぶことを目的としている。実習は化学系教員、生物系教員、物理系教員、地球科学系教員のそれぞれの指導の下、多分野による実習を行った。乗船実習は学生にとって強く印象に残るものであるが、事前の学習が不十分であるため現場での学生の理解が追いついていないという反省点が挙げられた。



写真3 京都大学 宮下教授講演の様子

「三隻同時観測で発見した現象」

講演者：三重大学大学院生物資源学研究科

立花義裕 教授

勢水丸を利用した共同研究の例として、東北沖で行った3隻同時観測の紹介があった。(写真4)

黒潮は低緯度から高緯度に膨大な熱を運んでおり、黒潮統流域で起きる大気海洋相互作用は、日本のみならず世界的な気候変動にも影響を及ぼすものとして注目されている。その大気と海洋の関係を探るため、勢水丸、若鷹丸(東北区水産研究所)、淡青丸(JAMSTEC)の3隻でラジオゾンデ同時観測を行い、黒潮統流域における海面水温フロントの南北の大気構造データを取得したということであった。



写真4 三重大学 立花教授講演の様子

II. 拠点化事業の更なる展開

「食文化実習航海に参加して」

講演者：三重大学生物資源学部4年

森田充優 君

海洋食文化実習航海に参加した学生からの報告として、学生からの視点での実習の紹介と、実習中に行ったアンケート結果についての説明があった(写真5)。はじめに、海洋食文化実習航海は、海洋調査、漁撈体験を行う洋上実習と、魚市場見学、水産加工場見学、郷土料理の調理実習を行う陸上実習の2部構成であることを説明した。そして、実習の教育効果を調べるためアンケートを用いた調査手段を説明した。アンケートは実習前後に行い、各アンケートの結果から実習前よりも実習後の方が海洋環境、水産業、食文化に対する関心が深まったとして、海洋食文化実習航海には高い教育的効果があると述べた。最後に、海洋食文化実習航海を継続的に行えば、実習の意義はより

深いものになって実習生に伝わっていくのではないかと締めくくった。



写真5 三重大学 森田学部生講演の様子

「海洋食文化実習の利用拡大への期待と提案」

講演者：皇學館大学文学部 齋藤平 教授

海洋食文化実習航海に参加した他大学からの報告として講演が行われた(写真6)。はじめに、実習の所感や内容に触れ、その後、皇學館大学の行う主体的に地域の課題解決に取り組む人材、専門課程で学ぶ人文知を社会で活用するというCOC事業について説明した。勢水丸の海洋食文化実習と、地域と連携した教育・研究を重点的とするCOC事業が連携することは大変有意義で効果的であると述べた。最後に課題として実習参加中の学生の他の授業の出席との折り合いを解決すべきとの課題を提示した。



写真6 皇學館大学 齋藤教授講演の様子

「三重県産水産物の流通や付加価値向上に関する取組の紹介と行政の役割について」

講演者：三重県農林水産部水産資源課

永濱享 課長

三重県産水産物の流通と行政の役割について講

演が行われた(写真7)。流通の現状として、近年は魚介類よりも肉類を好む傾向であり、若年層ほどその傾向が強く、魚介類の消費量が減少しているということ述べた。行政として付加価値向上のためブランド化などに取り組んでおり、対処すべきは漁業者の所得向上であり、獲るだけの時代からどのように売るかの時代に変化しているとの説明がなされた。最後に、「社会人は、経験値、想像力、人柄、課題設定等々が大事。学生の内にできることは色々やっておくことをお勧めする。」という参加学生への呼び掛けをもって講演を終了した。



写真7 三重県農林水産部 永濱課長講演の様子

III. 総合討論

各講演者の講演が終了後、会場全体での総合討論が行われた(写真8)。以下に討論内容を紹介する。



写真8 総合討論の様子

- 三重県には松阪牛や牡蠣など特産となるものが多数あるが、スーパーでは、牡蠣は広島県産や宮城県産のものが大半である。地産地消の点からも地元ブランド物を多く還元できないのか。／ブランド物というのは、その他のものに比べて値段が高く、どうしても高く買ってくれる所に行ってしまう。また、地産地消についても、安定して地元供給し続けることができるような生産量があるかというところが課題になってしまう。
- 京都大学は総合的な海洋学習と考えているようだが、理系科目のようであり、皇學館大学のように文系要素を含めた海洋教育については考えていないのか。／文系的な海洋学習は大いに有意義だと思っており、これから考えていきたい。
- 皇學館大学から指摘のあった、実習航海に参加するには他の授業を休まざるを得ない課題についてどう考えるか。／長期の実習航海は夏季休業などの期間に行うなど工夫はしているが、抜本的な方策はなく他の先生方の理解を得ていくしかないのではないか。

最後に、三重大学大学院生物資源学研究所 常清秀 拠点化支援室長代理より総合討論のまとめが行われ、総合討論を終了した。

3. おわりに

本シンポジウムは教育関係共同利用拠点第2期の始まりとなるもので、その進展の確認、今後の展開についての内容となった。講演後に行われた総合討論では、各講演に対しての質疑応答のほか、今後の展望や課題についての論戦が展開され、会場を賑わせた。関係者だけでなく大学内外から多くの人が参加し、さまざまな視点からの意見が挙がり、たいへん有意義なシンポジウムであった。

共同利用拠点事業は学内外に開かれた事業というだけでなく、地域貢献にもつながるものである。教育プログラムの充実、地域とのつながりを保ちつつ本シンポジウムで提示された今後の展望への課題に取り組み、なお一層の共同利用拠点事業に対する広い周知が必要だと思われる。